

Title	プロジェクト科目報告会 (2月2日 大学院校舎334教室) ; 平成20年度若手研究成果報告会 (2月10日 東館6階G-SEC Lab)
Sub Title	Debrief session for project course 2008 ; Annual seminar of young researchers
Author	伊澤, 栄一(Izawa, Eiichi) 小川, 芳範(Ogawa, Yoshinori)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.8, (2009. 6) ,p.4- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000008-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プロジェクト科目報告会

(2月2日 大学院校舎 334 教室)

Debrief Session for Project Course 2008

2009年2月2日、大学院校舎 334 教室にて、プロジェクト科目の報告会が開催された。プロジェクト科目は、通年の大学院履修科目であり、通常の講義形式の科目とは異なる。履修する学生が主体的に実験に取り組み、1年間の成果の発表を以って単位の認定となる。本科目は、本人文グローバルCOEの前進である21COEと並行する形で立ち上げられた「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の主軸科目として開講され、発展してきた経緯があり、準備期間まで含めると今年度で4年目となる。昨年度は計5つのプロジェクトが開講され、報告会では10名の履修者が発表を行った。内容は、ヒトの臭覚による推論能力の検討から、生得的な言語基盤の検証、脳活動解析、論理学、データベース構築など、昨年よりも多岐に渡るものであった。数年来継続することでピンポイントな検証に至ったテーマや、今年度から新規に学生が考案したテーマも含まれており、いよいよ分野横断的な学生主体の科目となってきた感があった。この報告会は、成果発表会と銘打ってはいるものの、整ったデータの発表を単に求めるという場ではない。形となったデータではなくとも、必ずしも自身の専門ではない実験テーマに取り組んだその過程を、異分野

の教員と多面的に意見交換を行うことで、実験として構築させる方法論を学ぶ場としての役割をより一層帯びてきた気がする。学生のこのような体験は、成果としては目に見えにくいかもしれないが、開講当初から履修院生らが積み重ねてきたものが、科目の特色として根付きつつあるように感じた。分野横断的な本教育拠点の特徴を生かした自由度の高い科目として、今年度以降もさらなる展開が期待される。
(伊澤栄一)

A debrief session for Project course 2008 was held on 2nd Feb. 2009. Ten graduate students gave oral presentations about the progress of their research projects. The topics of these projects were multidisciplinary, involving a variety of methods, such as psychology (behavioural experiment, meta-analysis, and fMRI study), linear logic, and even practical skills of building database. The presenters received the comments and guidance from their advisory professors. At the end of the session, certification of PROJECT course 2008 was awarded to each student.

平成 20 年度若手研究成果報告会

(2月10日 東館 6 階 G-SEC Lab)

Annual Seminar of Young Researchers

2009年2月10日、三田キャンパス東館 G-SEC Lab において、平成 20 年度若手研究成果報告会を開催した。同会には、本人文グローバル COE の若手研究者 24 名と、本 GCOE の事業推進担当者によって構成される指定質問者が参加し、午前9時から午後7時近くまで、途中昼休みをはさんだものの、ほぼ半日にわたって、熱のこもった発表および質疑応答が行われた。

拠点リーダー渡辺茂の開会挨拶で始まり、慶應義塾大学文学研究科委員長中川純男教授の講評をもって幕を閉じた同会は、大きく6つのセッションに分かたれ、それぞれのセッションにおいて専門領域の近い数名によって、様々な視点から、本 GCOE が研究主題として掲げる「論理と感性」をめぐる発表が行われたが、その概略は以下の通り。

セッション1：遺伝と発達からのアプローチ、セッション2：マーマセット研究を通じての比較認知神経科学的アプローチ、セッション3：認知科学的アプローチ、セッション4：脳科学、神経生理学からのアプローチ、セッション5：美学・美術史における論理と感性、セッション6：論理学・哲学的探究

分野ならびに方法論を異にする 24 名の発表は、「百花繚乱」かつ「百家争鳴」の相を呈した。したがって、その内容を一言で尽くすことは到底できない。しかしながら、「論理と感性」という共通テーマにたいする多方向からのアプローチが、このよう

な形で「一堂に会する」意味はけっして小さくない。「専門外分野の知見に耳を傾け、新たな知識を獲得しつつ、自らの研究について再考を行う場」との拠点リーダーの言葉どおり、今回の成果報告を通じて、「近くて遠い」同僚たちの試みに多くを学ぶとともに、論理—感性研究における多元的協同の必要性および可能性についての自覚と期待の念をいっそう強くした次第である。

(小川芳範)

On February 10, 2009, a meeting was held at G-SEC Lab in East Building, where each of the twenty-four CARLS junior researchers gave a presentation on the contents and prospects of his/her research project in front of the attentive audience consisting of the interested public and senior researchers of the CARLS. The event continued for over eight hours but was lively with heated discussions throughout.

